

大学放浪記 (30)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、タイの大学で重要な行事のひとつとして継続して実施されている「教員の日 (Teachers' day)」について記す。この行事については生徒である学生が教員に謝意を表する日という意味がある。大学によってその様式も異なるので一概には言えない、チェンマイ大学に籍を置いていたときも、また、たまたま訪れたタマサート大学でも偶然参加の機会を得た。マエジョ大学での行事がどうなのかは初めての参加であり、興味もあった。またこの行事への参加については前日の夕刻に副学長とインターナショナル・カレッジ (International College) の副学部長、並びに A A A C U (Asian Association of Agricultural College and University) で顔を合わせた面々が集まり副学長の「ご苦労さん」という気持ちを含めた奢りでデイナーを馳走になった時に、副学長から貴方も出てくれと言うことで本当に急に決まった話であった。その時ついでに出た話は、教授 (伊藤) はこれまで国際交流で多くの経験、実績を持っているので、時にはインターナショナル・カレッジでも時々招聘して院生に、大学での勉強、学生生活において如何にモチベーション (Motivation) を高め、キャンパスライフ (campus life) を実りある物とするかを話して貰える機会を持つてはどうか、と言う問いかけに、これまた即断即決で決まった話がもう一つある。筆者に取ってはマエジョ大学に赴任以来、オンラインでの講義は1回につき5時間の講義を3回ほど実施しただけなので、直接学生と対面で行う授業は初めて、であるので非常に嬉しかった。水曜日の夜に夕食を馳走に成り、翌朝の8時半からティーチャーズ・デイ (Teachers Day) のイベント参加の呼びかけといい、もう一つの講義への招聘といい、極めて間際での要請であったが、本当に嬉しかった。長引くコロナ禍で上記したように対面での講義は全くやっていないので、気が滅入る毎日であり、時には何の為にこの場所に居るのか、と言う馬鹿げた低レベルの気持ちすら頭を持ち上げてくる状況であったから、その嬉しさはひとしおであった。水曜日の夜に話が決まり、翌日の木曜日のイベント、また週末を超えて週明けの月曜日に1時間ほどの講義を依頼されるというタイの大学ならではの意志決定の方法である。流石に書類上の手続きを揃える関係もあり、また聴講する学生の都合を勘案して、この講義の実姉予定は3日ほど遅れることになったが、とにかく筆者に取っては、学生に対面講義ができる願ってもない大きなチャンスなのである。

さて上記のティーチャーズ・デイのイベント (Event) であるが、聴講、出席する学生は全て学部新生で、王室関係者が毎年、卒業式に來られて証書を直接手渡す大きな講堂 (Auditorium) で行われた。卒業式では6000人が一堂に会するが、この日のイベントでは新生のみと言うことも有り、またCOVID-19を考慮して1列おきの椅子の配置になって居た。それでも講堂一杯に埋め尽くされた状況は参加者を圧倒する雰囲気を出

さんばかりであった。教職員の中にはこの日に表彰を受ける教員も参加して、学長より表彰品（楯）を一人一人が受賞した。最も印象的なのはこのように表彰を受けた教職員を含め、筆者のような来賓も全員がフロア（Floor）の前面に設置された椅子に座しているところに、新入生である学生達がそれぞれの教員の前に立ち、自分の専門分野を示す造形物を教員に贈るというもので、その贈呈行為は3回に亘り行われた。贈呈品を貰った教員はその学生に何か一言励ましの言葉を投げ掛けることになって居る。いずこの地でも例に漏れず、こうしたイベントへの参加を好まない、あるいは否定する学生もいくらかは居るようである。卒業式も王室関係者が証書を手渡すなどの行為すら反発する学生も出てきているが、日本ではどうかとの話になった。最近の日本の大学ではどうなっているかについては多くを知らないが、まずもってティーチャーズ・デイと言う行事すらない。大学によっては新入生のみならず研究室の学生が集まって、指導の教員に日頃の教育指導に謝意を表す場合もある。世代交代、ジェネレーション・ギャップ（Generation gap）に伴い若者の思いは大きく変わり、かなり反抗的な行動を起こす者も少なくないと言われる。日本では卒業式も簡素化され、証書も卒業生の代表者が受け取り、あとで他の学生に振り分けるのが一般的で有り、卒業式当日の服装も決まりはない。タイでは帽子にガウンがユニフォームとなって居る。日本の大学を操業する留学生の中には、そうしたユニフォームがあって欲しいと言う気持ちから、大学でそうした対応がないのなら、自分で作るということでデザインをして自前のユニフォームを作っている卒業生も居る。ジーンズやスニーカーもOKであり、クラシックな高下駄に紋付き、袴という出で立ちもある。女性は明治時代の、あるいは江戸時代後半に広く受け入れられた矢絣の着物に袴というのが見られるのもこの日の風物詩（？）でもある。もちろん、卒業式の当日限りの着用であるからレンタルのケースが多い。早晚こうした伝統的イベントは消えて無くなるのではと不安に思う教員もタイでは少なくない。何処に原因があるのかと聞かれ、やはり教育に原因があるのではと答えたが、難しい問題である事に違いは無い。話はいくらか違うが、そういえば地方の市長村で挙げる成人式もよく似た不祥事が起きることは衆知である。タイでは成人式が有るのかどうかは知らないが、日本では一時このような不始末がテレビや新聞で報道され、市民の怒りを買ったのを記憶している。若いときのエネルギッシュな動き、溢れんばかりの熱気、思い切った行動力が若者のトレード・マークであるかのように取り扱われることに異論はないが他人に迷惑を掛けたり、時には法にも触れる違法行為が許されないのは言うまでもない。良き伝統はできるだけ残した方が良いが、伝統が良くてもそれを正しく理解できていないと意味がない。この観点から筆者は教える側の「教育の問題」と記したのである。正しくその意味を理解させるには、教育する側の方法と熱意（愛情、情熱。心に響く説明）がいささかでも足りない、不足している、と見るのは偏見であろうか。

「子供は親の背中を見て育つ」と言うから教育する側の姿勢を再度チェックしてみると何かが出てくるのでは・・・・・・？ タイの大学では日本の大学と異なり、学部生がとろとろんの様に4年で全ての学生が卒業する訳ではなく、多少は卒業できずに居残る学生がいる。

その理由が単位未取得にあるのか、その他の事情によるのかは個々に異なりいろいろあるが、未取得の場合もかなりあるらしい。院生では修士論文や博士論文が規定の編数まで公刊されなかったとか言う場合は多々あるが、日本の場合、学部生では余り聞かない。タイでは学部生でも残留する学生がいる。厳しいと言えばそれまでだが、必ずしも厳しさだけでは無いようである。指導教員と馬があわないとか、関係が良くないとか言うのも良く聞く。教員と余り会う機会が無いとか、連絡をしても適切な返事がない、忙しくて会えない等の理由もある。これらは教育する側の不十分な対応と考えられる。ティーチャーズ・デイ前日の打ち合わせでは、筆者も3分ほど大学生生活を如何にすれば実りあるものにする事が出来るか、その方法、秘策、経験などを話して欲しいと言われて居たが、とてもそのような時間は無く、結局その機会は与えられることなく、イベントは終わった。3分というごくわずかな時間で有り。余程要領よくまとめ。また記憶に残る用語を駆使してまとめないと効果はない、と言うことで随分と頭の中で考えて居たが、その機会は空しく消えた。いずれ後日に予定為れている特別講義の時間に思い切り話をさせて貰えることを祈念してその日は終えた。



図1 イベント開催前に会場を埋め尽くす新入生



図2 イベント開始での学長スピーチ